

吉野 正 男 著

『幼児の遊びと児童の学習』

——保育と授業の関連を考える——

小倉 竹治

著者は国士館大学初等教育専攻に、保育内容の研究を講ずる学究である。幼小の関連という声を聞くようになって既に久しい。これは現実には、幼稚園と小学校の関連が、必ずしも十分ではないということでもあろうか。

幼稚園・小学校のそれぞれの領域についての研究は決して少なくはない。しかし、両者の関連について着目した研究はまことに稀であり、この分野の研究者として第一線にある著者によって、その関連研究の道が開かれたといっても過言ではあるまい。

著者は都下の名門小学校長として、幼稚園長を兼任された稀な経歴の持主であり、四十年にわたる児童教育と十数年にわたる幼児の保育を通して得られた著者の研究の成果である。

本書は、幼稚園や保育所の幼児において主たる経験や活動である遊びと、小学校で最も時間をかける教科学習が、どんな特質をもって、どのように関連するかをテーマとして追求された著述である。

まず本書の内容目次をあげてみると、

- 一、幼児の遊びと児童の教科学習
- (1) 幼児の遊びと児童の学習
- (2) 幼稚園と小学校の教育内容
- (3) 幼・小教育内容の関連

(4) 幼児の遊びと児童の学習の指導

二、「いっこ遊び」における幼児と児童

(1) 「いっこ遊び」で得られた諸経験

(2) 模倣・再現の深まりとイメージ

(3) 幼児の「いっこ」と児童の学習の関連

三、幼児の遊びの総合性と小学校の合科

(1) 総合的な幼児の遊びと小学校の合科

(2) 合科教授（学習）の先例と合科実践の理由

(3) 合科学習の構造

四、遊び・教科学習の過程と指導

(1) 遊びの過程・教科学習の過程

(2) 遊びにおける思考、追究過程としての学習

(3) 展開計画と基本事項と指導

五、幼児の遊びから児童の学習への関連

(1) 豊かな人間性を目指す

(2) 探究の意欲と態度を育てる

(3) 創造性を育てる

右に加えて、次の二論文を収めている。

一、幼児から児童そして教育

二、自立をめざす家庭教育

この目次を通して、著者の研究の系統性と行き届いた研究内容をうかがい知ることができる。

本書を通して著者が人間形成の基盤として幼小の関連について特に掘りさげて主張されている論点のいくつかを挙げると、

一、遊びと教科学習を貫くものとして、幼から小にわたって連続的に育てられ

るものの一つは探求の態度である。

二、次に自己創造をあげている。幼児も児童も経験や活動をとうして、自己を創造する。

三、さらに自立の過程をあげている。社会的胎児とも見られる乳児期から幼児の遊びをとうし、児童期の学習を重ねて自から考え自から判断して行動する自立の能力を高めてゆく。

現下幼小一元化が叫ばれる折から、この道の専門家ならびに研究に携わる学生諸君に、本書の内容を紹介したにとどめるが、著者の今後両者の関連における指導の展開についての研究の成果を期待し祈念するものである。これこそ混乱するわが国の教育の進展にも、さらにまたわが学界への貢献も少なくないと確信する。著者の益々御健勝御加餐を念じつつ、この小稿を欄筆する。

(本学教授・教育学)

「幼児の遊びと児童の学習」(B5版・一六〇頁・一、〇〇〇円・スペース社刊)